愛知工業大学研究報告
第３２号Ａ　平成９年

司馬遼太郎の比較文化的視点

R. Shiba´s Comparative Viewpoint of Culture

森　　豪

Tsuyoshi MORI

Abstract R. Shiba has a comparative viewpoint of culture. That viewpoint makes shiba catch the relation between cultures or between things in the real world. That can be called a real, relative, and objective viewpoint, too. It needs a selfless viewer. Shiba got it brfore World War II. It was during the war that he made it his real viewpoint as a writer and found his theme for life, what Japan and Japanese are. Shiba described Ryoma Sakamoto in his novel, *Ryoma Ga Yuku* as the embodiment of what he had experienced and thought during the war.

1．はじめに－比較文化的視点

司馬遼太郎の根本には，事物を相対的に見ようとする視点がある。その文化に関する視点を，比較文化的視点とここで呼ぶ。文化を相対的に見る視点である。

司馬のペンネーム（本名・福田定一）自体が彼の比較文化性をものがたっている。このペンネームを使用しはじめたのは，昭和３１年の「ペルシャの幻術師」以来で，『史記』の司馬遷に遼か及ばぬという意味でつけたと司馬は記している。[1)] それを，司馬遷を遼かに敬慕する，さらには遼かに凌駕するとの意味を付け加えて解釈する向きもあるが，重要なのは司馬遷を意識していることである。「遼か及ばぬ」という謙虚さは司馬の一つの特色であるが，司馬の視点の特色ということから言えば，遼かに望むが適当であると思われる。遠望である。

「遠望」が司馬の特色であると，明治を遠望することに関して，鶴見俊輔が司馬との会談で指摘したのに応じて，司馬は陸軍の兵隊になる前の自分の人生構想について，次のように述べている。

愛知工業大学　基礎教育系言語文化教室（豊田市）

司馬　・・・モンゴルの草原と中国地域との境堺に，たとえば具体的に言うと張家口という町があります。行ったことはないけれど，そのあたりのイメージがあってですね，そこに領事館があるだろう。そこの下級職員になる。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・下級のノンキャリアの書記を十年する。そこで，モンゴル人は遊牧民で，中国人は農民ですから，まったく理解および地球の利用の仕方のちがう商売なもんですから，匈奴の時代から葛藤し合っているわけです。僕はモンゴル人の方が正しい，今でもそう思っていますけどね。農民の方が地球を破壊している，と，こう思ってて，それを小説にどうして書けるのかわかりませんが，それを小説に書く。それで僕の一生は終わる。テーマはそれだけだ，と。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

鶴見　遠望して歩くっていうのは，まさに，モデルとしてはモンゴル人なんです。モンゴル人は，千年の昔から，地平線の向こうから誰かやってくるのを見て，即座に対応する。

その能力がなきゃ生きられない。まさにモンゴル人のモデルですね。・・・・・・・・それもモデルとして，日本を見て書いてこられたわけですね。日本人は大体，遠眼がきかないと思うんですよ。[2)]

ここに述べられた司馬の人生構想は，二十歳で学徒出陣する前のもので，時間的，空間的に遠望する性癖が，作家になる以前に備わっていた本質的なものであったことを示している。鶴見が遠望はモンゴル人の特質で，日本人は遠眼がきかないと言っていることからすれば，司馬はモンゴル人である。

そして「モンゴル平原と中国地域との境界に・・・・」という言葉は，司馬の本質的な，相対的，比較文化的視点の在処を現している。境界に立つ視点である。

遠望は遠くまで見えるので，多くのものが見え，異なった文化のものも見える。比較文化的視点となる。中国を意識するだけでも十分，比較文化的意識があるといえるが，司馬は日本と中国だけでなく，モンゴルをも意識に入れることによって，中国もさらに相対化され，その相対化は徹底している。司馬のは，三重の複層をなす視点である。

この人生構想は，彼が軍隊に入ることによって，「ペケ」になってしまう。しかし戦争を生き抜き，戦後，作家として生きた彼の人生は，領事館に勤めることはできなかったけれども，「それを小説に書く。それで僕の一生は終わる。テーマはそれだけだ」と言った言葉のなかの「小説」に相当する『韃靼疾風録』を最後の小説として書けたことから見れば，ほぼその構想どおりであったと言えるのではないか。それはまた司馬の強靭な精神力と誠実さを示している。

2．遠望と俯瞰と無私

遠望という視点は，遠近を高低の関係に移せば，鳥瞰または俯瞰となる。それと創作との関係が「私の小説作法」に於いて述べられている。

ビルから，下をながめている。平素，住みなれた町でもまるでちがった地理風景にみえ，そのなかを小さな車が，小さな人が通ってゆく。

そんな視点の物理的高さを，私はこのんでいる。つまり，一人の人間をみるとき，私は階段をのぼって行って屋上へ出，その上からあらためてのぞきこんでその人を見る。おなじ水平面上でその人を見るより，別なおもしろさがある。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ある人間が死ぬ。時間がたつ。時間がたてばたつほど，高い視点からその人物と人生を鳥瞰することができる。いわゆる歴史小説を書くおもしろさはそこにある。[3)]

また俯瞰と歴史小説との結び付きについて，「歴史小説を書くこと－なぜ私は歴史小説を書くか－」に於いて，次のように述べている。

某という人物のその人生が完結したあと，時間が経てば経つほど，私にとって好材料になるようである。時間が経たねば，俯瞰できない。俯瞰，上から見おろす。そういう角度が，私という作家には適している。たとえばビルの屋上から群衆を見おろし，その群衆のなかのその某の動き，運命，心理，表情を見おろしてゆく。この俯瞰法（つまり歴史小説をかく視角）で某を見るばあい，筆者は某そのひと以上に某の運命とその環境，そしてその最期，さらには某の存在と行動がおよぼしたあとへの影響，というものを知ることができる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

歴史小説は，そういう視点に立っている。そういう視点でものを見ることの好きな，もしくは得手なひとが，歴史小説を書くのだろう。私もそのひとりである。[4)]

ある人物を見おろす。その人物の群衆のなかの姿，運命，そしてその環境など，その人物をより広い角度からながめ，その全体像をつかむことができる。それは，その人物をさまざまな事物のなかで相対化して見ることである。その俯瞰という視点でものを見る人が歴史小説を書くと司馬は言う。

それはまた，彼の場合、比較文化的性格を帯びると言える。彼が「私の小説作法」で「歴史が緊張して，緊張のあげくはじけそうになっている時期が，私の小説には必要なのである」[5)]というのは，文化の衝突の緊張が彼の小説のテーマになりうるということである。もしくは人物が文化の衝突としてとらえられることでもある。

遠望にしろ鳥瞰，俯瞰にしろ，見る眼が曇っていれば見えない。司馬のよりよく見る方法は，自我の在り方に関係している。

物を見るというのは，自分を極小にまで縮めて行って，できれば空の一点になりおおせるときが，もっとも鮮やかに見えることでしょう。[6)]

無私である。小説が自己拡大の作業であるとするなら，自己の縮小による自分の小説は小説といえるのかどうかという司馬が常に感じていたらしい疑問は置くとして，この彼の見方はいわゆる科学の客観的見方に通じる。科学は文学に対立するものと一般に受け止められている。しかし戦後，新聞記者となり，大学・宗教記者となって，大学では自然科学畑ばかり歩いた司馬にその対立はない。それがまた自分が小説家と言えるかどうか疑問を抱かせることにもなるのであろうが，科学，そして宗教（彼が担当した仏教）の世界は相対的世界であり，それらの世界を見る眼が，客観的見方であり，相対的視点である。それが文学の場合にも大切であると次のように言われている。

大型動物を見て樹の上で跳びあがるリスのように生れたままの，さらには素裸の感覚が，物を見，感じ，かつそれを表現する者にはいつも用意されていなければならない。その上で，さまざまな次元での比較や，比較を通じてやがて普遍的な本質まで考えてゆくことが，物を書くということの基本的なものである。[7)]

「比較や比較を通じてやがて普遍的な本質まで考えてゆく」視点が相対的視点であるが，その根底に「生まれたままの，さらには素裸の感覚」が必要であるという。この「生れたままの，さらには素裸の感覚」というのは，子供の感覚と言えるであろう。好奇心に満ちた無心の（＝自己の縮小）きらきらした子供の眼が，相対的視点，さらには比較文化的視点の根底に必要であると言える。

3．日本人とはなにか

司馬の生涯の作家としてのテーマは，「日本人とはなにか」ということであった。そのテーマを強く意識したのは，文化の衝突の場であった太平洋戦争であった。戦争を遂行していた軍部は，比較，相対的視点を欠いていた。平成8年2月12日に72歳で死去した司馬の最期の言葉についてみどり夫人が述べている。

私とかかりつけの先生が説得して，で，「頑張ります」と司馬さんが最後に呟いて手術が決まりました。でも「頑張ります」なんて，あんなこと私は司馬さんに言わせたくなかった。頑張るという言葉はあまりに司馬さんらしくない言葉でしょう。・・・・・・「頑張るぞ」なんて司馬さんが最も嫌った言葉だったと思います。そういう掛け声や気合いだけで，この国が先の悲惨な戦争に突入していったこと，そういう昭和の日本人の日本人らしくない精神主義を司馬さんは生涯をかけて厳しく問いただしてきた人なんですから。[8)]

「神国日本」に代表される「掛け声」は，比較対照の視点を奪うものであった。比較対照の相対的視点をもつ司馬が，敵と味方の戦力の相違を実感したのは，中国での戦車隊体験に於いてである。

赴任した戦車第一連隊は，対ソ用の戦車隊でしたが，ソ連戦車の威力の方がはるかに大きく，日本の国力に絶望的な思いをもって，初めて日本国家の近代性というものを，「技術」の面から考えるようになりました。[9)]

戦争末期の日本の戦車は，スパナで「削るとボロボロに削れてしまう」ものであったという。「物理的条件」だけで戦う戦車は，その条件の優劣が勝敗と生死に直結する。必死の条件のなかでのこのソ連との「技術」の比較は，「日本国家の近代性」を考える視点を司馬に与えた。そして本土防衛のために帰った関東平野で，東京からの避難民を守るのでなく踏み潰してアメリカ兵を迎撃するのが戦車隊であるのを知って，日本国家，日本人そのものを問題とする視点が生まれた。

なぜ，こんな馬鹿な国に生まれたんだろうということなんです。ただ，明治は違ってたろう，と。あるいは，明治以前は違ってたろう，と思ったことが，僕のその時の自分への救い，というかな・

・・・そういうもんでした。明治もしくは明治国家以前のことはよくわからないもんですから，四十歳前後の頃から，こうだったんだ，というのを書いているわけです。それは二十二歳の僕への，まあいわば手紙みたいなもので。やっとわかった，っていうことを書き続けて，大体今，終わりましたですね。[10)]

司馬の四十歳前後の作品で日本国家と日本人を真っ向から取り扱ったものは，『竜馬がゆく』（三十九歳～四十三歳）である。この作品には，司馬のすべてが出ており，竜馬の視点は司馬の視点であると言っていい。

4．『竜馬がゆく』の竜馬

『竜馬がゆく』の「あとがき五」で，司馬は竜馬の特質を次のように述べている。

筆者は，この一言をつねに念頭におきつつこの長い小説を書きすすめた。このあたりの消息が，竜馬が仕事をなしえた秘訣であったようにおもわれる。その点，西郷もかわらない。私心を去って自分をむなしくしておかなければ人は集まらない。人が集まることによって智恵と力が持ち寄られてくる。仕事をする人間というものの条件のひとつなのであろう。(8,421)[11)]

「この一言」とは，「自分は役人になるために幕府を倒したのではない」(8,421）という無私の言葉である。無私が「仕事をする人間というものの条件のひとつ」であるのと同時に，ものをよく見る時の底に必要なものであり，相対的視点の根本に欠くことのできないものである。それはまた，先に述べたように「生れたままの，さらには素裸の感覚」であり，子供の感覚である。竜馬にはそれが終生備わっていたと司馬は繰り返して言う。竜馬は死ぬまで子供っぽい面をもっていた。

竜馬の子供の側面は，まず馬鹿な竜馬として描かれる。幼少の頃より「坂本の寝小便垂れ」，「洟たれ」，「坂本の泣き虫」と呼ばれ，文字を教えてもおぼえられず，「坂本家の廃れ者」になるかと言われるほどの鈍童であった。長じて江戸に剣術修行に出て腕をあげても，「よいか，あの本町筋一丁目のはなたれでさえ，千葉道場の塾頭にまでなれたのじゃ。自分を見棄てずに努めるんじゃぞ」と言われる「鈍才のあこがれ」で，神童であった武市半平太が「秀才の代表」であるのと大きな違いがあった。(1,10)竜馬が馬鹿呼ばわりされたことは次の描写でも分かる。

「竜馬どのはやはり馬鹿ですね」
（またか）
さすがの竜馬もだんだん腹がたってきた。
「ばかばか，ちゅうのは，拙者は子供のころから聞き倦きちょりますが，こう矢継早にいわれると，よい気持が致さぬものでありますな」
「だって，ばかでございますもの」
「ほんとうに馬鹿かな」
竜馬は考えこむふりをしてみせた。というのは擬態で，じつは腹が煮えている。お田鶴さまは，くどすぎるではないか。
「どこが，ばかじゃ」
「そこが」
お田鶴さまはくすくす笑って，
「ばか」
といった。その，竜馬を見つめている笑顔が眩暈がするほどあでやかにみえた。(2,142)

幼少より竜馬が馬鹿よばわりされたのは，一般に共有される社会通念からみて，その行為，知識，判断力が劣っていると見られたからである。この引用の田鶴という女も女の気持ちが分からぬという点で相変わらず馬鹿だと言っている。しかしその馬鹿さに魅了されている。最後の「ばか」という言葉は，「好き」と同意語である。竜馬の馬鹿は魅力がある。

社会通念に合わないことは，それで劣等と判断される一方，それは社会通念を越えているとも判断できる。社会通念や常識という枠や型を越えた価値をもつのである。そこに魅力が生じる。

その魅力に気付いていたのが秀才の武市である。司馬は対照的人物を配することによって互いの印象を際立たせる手腕に優れているが，竜馬と武市の対照も鮮やかである。

武市は，「お前の生れつきの珍しさが，学問でうすれるかもしれぬ」(2,163）と学問をするという竜馬に言う。「この時代の学問とは，倫理道徳，みなおなじ型の人間をつくるのが，最高の理想」(164)

なのである。武市は学問の害も見抜き，「せっかく型破りにうまれついてきた竜馬が，腐れ学問でただの人間になってしまうのは惜しい」(2, 164) と思ったという。司馬はまた竜馬が「妙な学問をしていないだけに，ものを平明にみることができた」(3-165) と言う。

「平明にみること」は，「生れたままの，さらには素裸の感覚」即ち子供の感覚による。この感覚の有無の情景が，洋学をやるという竜馬の野望に対する武市の反応に見られる。

「洋学。――」

武市半平太もおどろいた。武市は漢学，国学に造詣がふかいが，洋夷の学問まではやっていない。第一，きらいである。洋夷などは，思うだけでも不潔で，四足獣とえらぶところがない，と武市は断定している。これが，俊才武市の限界であったが。(2, 170)

武市は，洋学を「平明に見ること」ができていない。自分の学問に毒されている。思想の膜のため，あるがままに見ることができない。これに対し，竜馬は世界に対し，子供のような関心をもっている。

竜馬は，世界のことが知りたい。万里の波濤を蹴ってこの極東の列島帝国まで黒船を派遣してくる「西洋」というものがふしぎでならなかった。

それは子供のように無邪気な好奇心であった。この好奇心があるために，武市半平太のように頑固な，

――天皇好きの洋夷ぎらい。

には，なれなかったのである。(2, 171)

この「子供のように無邪気な好奇心」が「生れたままの，さらには素裸の感覚」である。それが黒船を黒船として見させる。対象も見ないでヒステリックな拒否反応をするのではない。

洋学を求めた竜馬は，紹介された蘭学者から憲法と議会と人民による選挙を知って感動し，河田小竜から西洋の機械文明を知り，「これは武市の熱中している『攘夷』どころではない。うかつに『攘夷』をやれば，日本武士は全滅するのではないか」(2, 182) という視点をもつに至る。ここに竜馬の「仕事」の原点がある。おもしろいのは，次のような小竜と竜馬の会話である。

「のう坂本さん，西洋と対抗する第一は，まず産業，商業を盛んにせねばならぬ。それにはまず物の運搬が大事であり，あの黒船が必要じゃ」

「よし，その黒船をなんとか都合しよう」

「お前さんが，黒船を？」

と小竜はいった。

「手に入れるというのか」

「そうじゃ」

小竜先生は，がっかりした。いままで真剣に話してきて，損をしたような気がした。やはりこの剣客は，子供のころの評判がそうであったように，頭がおかしいのではないか。

「手に入れるとも，何隻も。蒸気で船を動かし，大砲をつんで世界をのしまわってみたい」

「そうかのう，お前さんがのう」

小竜は，声まで小さくなっている。一介の郷士の子がなにをいうのだといいたかった。(2, 183)

黒船を手に入れ，「世界をのしまわる」ことは，竜馬の生涯の夢であり，それを現実にしていくのが竜馬の「仕事」であった。その出発点がこの会話にある。おもしろいのは「この剣客は，子供のころの評判がそうであったように，頭がおかしいのではないか」という言葉である。竜馬の愚童の頃を彷彿とさせるが，竜馬は「根が利口な男」(3, 165) である。竜馬の馬鹿さは，社会通念を越えているという意味である。「がっかりした」小竜は、西洋に通じてはいたものの，竜馬を見る目は社会通念の目であった。

「根が利口な男」である竜馬は，社会的常識を越え，その枠におさまらぬ「型破り」であり，「その才，行動，独創的すぎる」(2, 163) のである。学問を始めた竜馬は，師にもつかず読み方も知らずに自分流に読んでゆくのだが，「大づかみに，意味はわかる」(2, 168) 才能をもっていた。「わしは文字を見ちょると，頭に情景が絵のように動きながら浮かんで来おる」(2, 170) という。

竜馬の「ものの大意を大づかみにつかみ，その本質をさぐりあてる才能」(2, 179) は，これまで触れてきた遠望，鳥瞰，俯瞰という見方に通じるのではないか。遠望も基本的には大づかみな，それゆえつかめる本質の見方、理解の仕方である。

理解の仕方が遠望的であることは，生き方に反映

する。たちどころに若者が志士になって国事を論じ，奔走するのに，竜馬は超然としている。性急に理想の実現に向かう秀才武市に対し竜馬は「まあ，ながい眼で見ろや」(3,235) と言う。結局，焦った武市の改革は失敗し，「すこしぐらいは阿呆なほうが結構じゃ。あまり小利口小才子では，眼前の物事に眼がうつりすぎて，かえって，身も事もあやまる」(2,89) と言われる結果となる。

「事は無理をせず，自然々々にやり，最後のここぞというところでわっと堤を切るなり，せくなり，大洪水を出して天下を一変させるのじゃ。早目に堤を切ってはならんぞ」(3,316) と竜馬は言う。「時期がくる。それまでは沈黙して，ただ行動準備をしているにかぎる」(3,358) と竜馬は考える。「眼前の物事に眼がうつり」すぎることを諫めると同時に現実の状況を見定めその本質的時期をとらえることの大事さを言う。竜馬は大局を見る現実主義者である。

ここで，竜馬の「遠望」をより鮮明にするために竜馬の師であり，「遠望の人」である勝海舟についての描写を引用したい。

> 勝自身，幕臣でありながら，幕府の利害で時勢をとらえず，一段上の日本的な立場で時勢をとらえ，そこからものを考えた。・・・この頭脳は，偏見的な立場をもたない，というので，竜馬だけでなく，薩摩の西郷などもずいぶん勝の意見をきき，西郷の日本をめぐる国際環境の理解は，多くを勝から受けているといっていい。(4,190)

勝の鳥瞰の眼は次のようにさらに描かれている。

> この男の眼からみれば，徳川幕府も，土佐も，会津も，箱庭の一点景にしかみえないらしい。
> (5,194)

しかも勝も竜馬も現実主義者なのである。

「諸事，この眼で見ねばわからぬ」

というのが，勝と竜馬の行き方である。現場を見たうえ，物事を考える。見もせぬことをつべこべ言っているのは，いかに理屈がおもしろくても空論にすぎぬ，というのが，この二人の行き方であった。(5,185)

さらに司馬は勝が「妖精」ではないかと言う。

> 勝には，妖精のにおいがする。そのいたずらっぽさ，底知れぬ知恵，幕臣という立場を超越しているその発想力，しかも時流のわきにいながら，神だけが知っているはずの時流の転轍機がどこにあるかを知っている。(5,209)

これらの引用にある言葉，「一段上の日本的な立場で」，「偏見的立場をもたない」，「箱庭の一点景」，「現場を見たうえ，物事を考える」，そしてこれらに「大人の眼ではなく，こどもの眼である。好奇心にみちた腕白小僧のようにきらきら光っている」(3,188) という勝の眼の描写を加えれば，遠望，鳥瞰，俯瞰，相対的視点，そして「生れたままの，さらには素裸の感覚」と無私を説明する要素となる。

竜馬は基本的に勝と同質である。竜馬は子供のような好奇心の強い眼をもち，河田小竜との会話で触れたように「蒸気で船を動かし，大砲をつんで世界をのしまってみたい」と言い，「気宇を地球上にひろげれば，幕府の諸藩もあったものか」(7,43) と言うほど，その視野は世界的である。「偏見的立場をもたない」ことは，当時としては稀有なことであるが，「おれは，この六十余州のなかでただ一人の日本人だと思っている」(7,384) という言葉に現れているし，なによりも彼の理想が一君万民思想，万民平等思想というべき「アメリカでは薪割り下男と大統領と同格であるというぞ。わしは日本を，そういう国にしたいのだ」(7,182) という言葉に示されている。この言葉は、同時に彼の比較文化的視点を示している。

比較文化的視点を竜馬が自覚していたことは，次の言葉でもわかる。

> おまえもおれも長崎にいる。毎日のごとく英人の商館員とつきあっている。だから，他の人間よりも，つまり薩の西郷や長の桂などよりもひとつ違った角度をもっている。(7,384)

英人は現実主義者である。現実は相対的であり，現実主義者の眼は相対的視点である。異国（幕末の頃，藩相互の関係は外国との関係に近かったらしいが）との関係となれば，比較文化的視点となる。そしてそれらの眼がよく見えるには，その根底に無私

が必要である。

竜馬は，「つねに，時代の風力，湿度，晴雨を測定しさらに自分の位置を知り，どうすべきかを判断した」(4, 315) という。この「天下を動かすこつ」を竜馬は，幕府の軍艦の計器類を扱いながら会得したという。計器は間違いなく無私である。ひたすら外界を，現実を測定する。竜馬は客観的計器となって変化する、相対的世界の関係を測定する。彼が計器類を「連中」と呼んで愛好したのがよく理解できる。

5．おわりに－竜馬と戦車のなかの司馬

竜馬の言う「天下を動かすこつ」をまったく欠いていたのが，太平洋戦争の帝国軍部であった。竜馬を描くことは，司馬にとって旧軍部を糾弾することであったと思われる。計器類への竜馬の愛好は，必死の戦車のなかで計器を見ていた司馬の姿を思い浮かばせる。司馬は必死の戦車のなかで「空の一点」にならざるをえなかった。

> ・・・敵戦車が出現した瞬間が私の死の瞬間になるはずでした。・・・自己を極小へ縮めてゆかねば，勝ちの可能性がゼロという戦車に同一化できず，そして極小化してゆく自己が，国家とか日本とかいうのは何かということを考えこむうちに，・・・国家というものの奇妙な姿態や，それを狂態へ駆りたてている架空の，それだけに声高に叫び，国民に脅迫をもって臨まざるをえない思想というものがよくわかるような気がしました。[12]

司馬の言う，物がよく見える自分を縮小した「空の一点」で「国家とか日本とは何か」という思いののなかに映じたのは，日本国家の奇妙な姿態であり，「・・・明治国家が，音をたてて崩れてゆく光景でした。私が，明治国家の成立の前後」[13] に興味をもったのもその「空の一点」の体験が契機になっているかもしれないと言う。

「国家を狂態へ駆りたてている思想」の源は，武市らの相対的視点を欠いた狂信的攘夷思想であった。それに批判的な竜馬を描く意味の原点がここにあるように思える。もともと遠望癖と比較文化的性質をもっていた司馬に，日本国家と日本人について考えるというテーマを与え，作家としての根底を与えたのは，確実な死に面し自己を空無化して「空の一点」になって，覗視孔から遠望していた時であった。その孔から司馬は世界を遠望していたと言える。そして戦車のなかでの司馬の思いは，竜馬という人間像に結実している。

司馬の比較文化的視点は，単に比較すればいいというものではなく，彼のいわば世界観，人生観が必然的にとるもので，根底に冷え冷えとした戦車のなかでの「空の一点」の体験がある。

注

1) 司馬遼太郎：足跡，司馬遼太郎の世界，429，文芸春秋，東京，1997.
2) 司馬遼太郎の世紀，76，朝日出版社，東京，1996.
3) 前掲書，34.
4) 前掲書，36.
5) 前掲書，35.
6) 前掲書，40.
7) 司馬遼太郎：言語についての感想，司馬遼太郎の世界，文芸春秋，5 月号，148-9, 文芸春秋，東京，1996.
8) 福田みどり：夜明けの会話－夫との四十年，文芸春秋，4 月号，135, 文芸春秋，東京，1996.
9) 足跡，423.
10) 司馬遼太郎の世紀，75.
11) 司馬遼太郎：竜馬がゆく，8, 412, 新潮文庫，以降の（　）内の数字は本書の巻数と頁数を示す。
12) 司馬遼太郎の世紀，40.
13) 前掲書，40.

（受理　平成 9 年 3 月21日）